風見章の原点

望月雅士

はじめに

政治家風見章（一八八六～一九六一）が、第一次近衛文麿内閣の内閣書記官長として日中戦争勃発期の内閣を支え、一九四〇年の近衛新体制運動ではその中心的な役割を演じたことは周知のとおりである。一九三〇年代後半から四〇年代にかけて、風見はまさしく主役級の政治家のひとりであった。もっとも近衛文麿が第一次内閣組閣にあたり風見を内閣の要となる内閣書記官長に登用したことには、風見本人でさえも予期しないことだった[1]。風見と近衛とはそれまで一度しか会ったことがなく、しかも風見は政界の一匹狼的な存在であり、まさに「見物席から舞台へ[2]」の大抜擢であった。この近衛首相の登用について、第一次近衛内閣総辞職直後にまとめた手記の中で風見は、軍部の推薦によるとの評判が立っていることを明確に否定し、それまでの自らの政治的行動の指針として、次の言葉を書き記している。

「予は日本を革新せんとせば、一切の既成勢力を打倒するにありと信じ、随つて対手として戦ふべき勢力と知り合ふ必要もなしとの考より、軍部の人達は勿論、その他謂ゆる政界上層の名士なるものとは殆んど没交渉なりしなり」[3]。

この手記からは、風見が「革新」に政治的スタンスを置いていたことがわかる。「革新」は、第一次世界大戦後から現状打破の意味合いで用いられてきた言葉で、一九二〇年代から四〇年代にかけて、政治のひとつのキーワード[4]であった。では、「日本を革新せん」と唱える風見は、「革新」によって何を目指していたのだろうか。この問いかけは、単に風見個人の思想面を問うにとどまらず、一九三〇年代後半に政治の中枢に躍り出た風見を通して、一九二〇年代から四〇年代にかけての時代が求めゆく政治の課題を明らかにすることでもある。

本稿はこのような問題視角の下に、風見が一九二三年一月に信濃毎日新聞社主筆に就任し、ジャーナリストとしての知名度が高まる以前の時期、すなわち少年期から第一次世界大戦を経て一九二二年に至る、その思想形成の原点とでも言うべき時期に焦点をあてて検討していくものである。

一　政治への志向

1　少年期の思想形成

風見章は一八八六年二月一二日、茨城県豊田郡水海道駅三番地（現常総市水海道高野町）の生まれである。風見と同じ一八八〇年代生まれの世代は、まさに一九三〇年代後半から四〇年代にかけて壮年期を迎え、アジア・太平洋戦争期の指導者となった者が少なくない。風見が内閣書記官長となった第一次近衛内閣を見ても、閣僚には一八八〇年代生まれが圧倒的に多い。この世代は小学生から中学生の頃に日清戦争とそれに続く三国干渉を経験し、対外戦争の勝

利と挫折がその思想形成に少なからぬ影響を与えている。風見は日清戦争時を次のように回想する。

「西南の役からは二十年余も経つてゐるので、もはや西郷隆盛を朝敵視する空気などはどこにも無かつた。それどころか西郷南洲といへば英雄豪傑の典型として、ことに少年の間ではもつとも人気があつた。その隆盛伝のどこに刺戟されたか、又たれが著したものであつたかは忘れてしまつたが、当時の高等小学三年生徒などに恰好の読みものとして書かれたものであ[つた]のだけは、たしかである。そしてその伝を読むうちに、一つのインピ[ス]レーションを与へられたのである。

西郷隆盛は日本の大陸発展の主張が通らないといふので鹿児島に帰つたのだ、それが後に西南の役となつたのだ、そして悲劇的な最後を遂げたのだ、しかるに今や日本は日清戦争をやつて大勝利を博して、大陸発展の口火を切つて落したのだ、西郷は先見の明があつたのだ、その西郷の志が今は遂げられたのだといふので、日清戦争以後に西郷南洲の人気は一層湧き立つにいたつたのであつたらうと思ふ。その頃に七ツ八ツであつた年ごろのものは、明治三十年に入りすこし物心がつくに、そこで無条件に西郷崇拝となり得たのである[5]」。

西南戦争後、西郷隆盛にはさまざまな形で英雄伝説が作り上げられていったが、日清戦争後の少年たちにとって、西郷は「英雄豪傑の典型」として圧倒的な存在だったことがこの回想からわかる。風見と生年月日が同じで生涯の友となる中野正剛も、西郷に心酔した一人である[6]。では風見の場合、西郷の何に惹かれたかといえば、「先見の明」があったという点にある。西郷が明治の初めに征韓論を唱え、「大陸発展」を目指した「先見」に、風見は子供心に感嘆したのである[7]。九歳の風見少年は、日清戦争の勝利によって国家の目指すべき方向が「大陸発展」にあることを確信したのであろう。風見は戦争の勝利のなかで国家を初めて認識し、その目標を自らの内に同化させたに違いない。そしてその過程の中で、西郷という歴史的存在が時代を先駆けた英雄として少年の前にあらわれたのであろう。しかし一方で、三国干渉による「大陸発展」への挫折は、後述するように風見の西欧に対する反発となってあらわれてくる。

風見は中学の五年間、茨城県内の三つの学校を経験した。まず一八九九年四月に土浦中学校へ進学し下宿生活を始めるが、水海道と下妻間に乗合馬車が開通し、また病弱な風見を母が心配したため、翌年四月に下妻中学校へ転校する。しかしこの下妻中学では、野球の応援問題をきっかけに学校当局と風見の属する三年生が対立して校長排斥運動へと発展したため、一九〇二年一月に放校処分となった。風見の権威や権力に阿ないパーソナリティは、この頃から芽生えていたことが確認できよう。そして三校目が下妻中学校分校から独立したばかりの水海道中学校で、一九〇三年一月に転入している。(8)

水海道中学五年の時、風見は同中学の同窓会誌『渚美』第一号（一九〇五年七月号）に「吾人青年の覚悟」と題する作文を寄稿する。風見がこの作文を書いたのは日露戦争最中の一九〇五年の初め頃と推測でき、今日確認し得る風見の文章のうち、最も早い時期のもののひとつである。この作文で一九歳の風見は「大陸発展」を目指して国家に貢献する「青年の覚悟」について、「吾人は、如何にしてか、最強国の一として、最大民族の一として、世界に起つことを得べき。吾人は、是に至りて、大に、我国の青年に向つて、世界的ならむことを、希望せざるを得ざるなり」(9)と述べている。では、「世界的ならむ」とはどうすることなのだろうか。

「我国の商業は、大に発達せざる可からざることを信ず。世界の地図を披かば、何人と雖も、日本が、無限の宝庫たる支那大陸、及び、西伯利亜広原を控へたるを見るなるべし。而して、吾人は、夫れ等の富源を見ると共に、我か国が、如何に有利の地位にあるかを思はずむばあらず。試に思へ、是等の大平原より生ずる産物は、如何にして、世界の市場に分布せらるべきか。（略）東洋に於て、此の大任を遂ぐべきものは、独り我帝国あるのみ。（略）吾人の海外貿易を呼号するもの、豈空想のみに止まらむや。余は我か国の青年が此の方面に於て、多大の勝利を博せむことを望まずんばあらざるなり」(10)。

ここで風見は、日本の商業的発達のために中国とシベリアの経済開発と、世界市場への「分布」を主張し、これこそが「東洋」のリーダーに躍り出た日本の「大任」であると論じている。そして、こうした「国威の宣揚」に対する「敵」の出現には、軍備を拡張して備えなければならないと唱えている。[11] その一方で風見は、「我か国の政治家は、多年海隅に割拠して、外交の必要を認めざりしより、自然、此の点に於ては、常に人に致され、他に制せらるゝの感なき能はず。二十八年、三国干渉以来のこと、以て証す可からずや」[12]と、政治の現状を強く憂慮する。風見は三国干渉を受け入れた政府に「戦敗国」、「屈辱」などの言葉を投げつけ、島国ゆえの外交の欠如を厳しく批判し、日露戦争はそうした三国干渉に甘んぜざるを得なかった「国民の公憤」が頂点に達した結果であり、その相次ぐ戦勝は日本を世界に知らしめる役割を果した[13]と論じている。「余は、また、日本青年が、政治的方面に向ひて、大に雄飛すべきことを一言せむと欲す」[14]との言葉に見られるように、風見の政治への志はまさに日露戦争を契機に確固たるものとなっていったのである。

2　人脈の形成―早稲田時代―

一九〇五年四月、風見は早稲田大学高等予科に入学し、一九〇六年九月に大学部政治経済学部へ進学した。風見の父は進学に必ずしも賛成ではなかったが、向学の念止みがたく、熱心に説得して許しを得ることができたという。[15] 風見の回想録によれば、早稲田へ進学したのは、学費の関係上できるだけ早く卒業する必要があったことと入学試験の勉強が嫌いだったためで、政治経済学部政治科を選んだのは「志は政治にあつた」ことが理由だとしている。[16] 一九〇二年に新たに発足した早稲田大学は、中学卒業者であれば志望者には無試験での入学を認めていた。また中学卒業が三月のため、高等学校へ進学する場合、七月に入試を受けて九月からの新学期まで半年間のブランクが生じるが、早

稲田では四月から高等予科の学期が開始され[17]、しかも翌年の九月には大学部へ進学できるシステムになっていた。これらの事情が風見の希望に適ったのであろう[18]。

風見にとっての早稲田時代は、その軌跡を考える上で重要な意味を持つ。まず注目すべきは、杉浦重剛が主宰する称好塾への入塾である。称好塾へは郷里の先輩にあたる大滝淵一郎[19]の紹介で早稲田入学の年の秋から入塾し、大学卒業まで在籍し続けている[20]。風見は入塾直後から称好塾発行の『毎週雑誌』の編集を担当するが[21]、この経験が後の新聞や雑誌編集の基盤を形づくることになったと言えよう。早稲田を卒業してからも風見は、在京時代には称好塾の活動に頻繁に参加し、昭和期に入っても『称好塾報』にその動静が見えるように、長い時期にわたって称好塾との関係を持ち続けた。後に活動を共にする桝本卯平や栗生鴻之助らとは称好塾の縁によるものである。

次に中野正剛らとの交流である。中野を中心に緒方竹虎（一九一一年専門部政治経済科卒）や阿部真言（一九〇八年専門部政治経済科卒）ら修猷館中学出身の学友と交流し、生涯にわたる人間関係を築いていったことはよく知られている[22]。風見と中野とは、東西南北会と称する組織をつくって牛込の貸席で会合を重ねたり[23]、南天坊の下で坐禅の修行を行ったりして親交を深めていった[24]。また中国の革命家を支援するための浪人会にも中野とともに参加したことがあると、風見は後年回想している[25]。浪人会は一九〇八年に田中弘之の首唱により結成され、頭山満や三浦梧楼らが中心となり、中国問題やアメリカの排日問題などに取り組んでいた国家主義団体である[26]。後述するように風見の送別会に頭山が出席するなど、ある時期まで風見は頭山とは親密な関係[27]にあった。

中野が塩沢昌貞ら早稲田の教員から影響を受けたのとは対照的に、風見が在学中に私淑した教員は特にいなかったようである[28]。その一方で「その頃の早稲田大学生活は奔放であつたから、いやな講義などには出席せずともよかつたので、専らフランス語の勉強に没頭した。また英語の夜学校に通つて英語を勉強した」[29]と回想するように、語学の勉

強に熱心に取り組んでいた。この語学の習得こそが、海外情報から議論を組み立てる、後の風見の論説スタイルを形づくることに貢献する。松本重治が日本における最初の本格的な外信記者は風見と評したその外電理解力[30]は、早稲田時代の語学の研鑽に負うところが大きかったのである。

二　海外情勢からの照射

1　論説家を目指して

一九〇九年七月に早稲田大学を卒業した風見は、中野正剛とともに『東京日日新聞』を発行する日報社に入社した。これは杉浦重剛の縁故で、千頭清臣社長に採用を依頼したものという[31]。しかし中野が入社早々、署名入りの連載記事を発表して頭角をあらわしたのに比し[32]、風見は天気予報などの雑報の準備ばかりだったため、わずか三か月余りで退社する[33]。風見のその後の足取りは必ずしも明らかではないが、一九二三年一月の信濃毎日新聞主筆就任までの間に、株屋山栗の名古屋支店長、一年志願兵（宇都宮野戦砲兵第二十聯隊入営）[34]、東京市電気局雇員（電気局長安藤保太郎秘書）[35]、大阪朝日新聞社記者、工業之日本社専務理事兼主筆、国際通信社大阪支社新聞部員、信濃毎日新聞特別寄稿家と職業を転々と変えていく。

風見のジャーナリストとしてのキャリアは、一九一三年一月の大阪朝日新聞社への入社とともに始まる。これは既に入社していた中野正剛と緒方竹虎の推薦[36]によるものである。当初、外報部に配属されたものの後に連絡部に移り、一九一六年一二月に退社したと見られる[37]。その事情について風見は、中野が辞めたのと同じ理由によると、戦後回想している[38]。中野は自らの政治的信念に生きるため一九一六年一二月に東京朝日新聞を退社し[39]、翌一七年四月の総選挙

に立候補するが（落選）、風見も同様の志を持っていたのである。だが政界への転身の準備は容易にはできなかったのであろう、大阪朝日退社後は工業之日本社に入社する。

工業之日本社は大阪に本社を持ち、工業系の専門誌『工業之大日本』を発行する出版社である。一九一七年七月号から社長が大阪実業界を牽引する外山捨造にかわり、「社中諸般の設備を新にして、新なる活動期に入」[40]ったが、この社内新体制と風見の入社は決して無関係ではないようである。もとより風見がいつ、どのようなきっかけで工業之日本社に入社したのかははっきりとはわからないが、大阪朝日新聞の土屋元作[41]の尽力が大きかったものと推測される。土屋と外山社長とは友人関係にあり、外山が新たに工業之日本社の経営に携わることになった際には、土屋が編集を担当すると目されていた[42]。『工業之大日本』一九一七年七月号には「『工業之大日本』に対する希望」と題する土屋の寄稿が載っているが、土屋は自らが編集に関わる代わりに大阪朝日を退社した風見を推薦したものと思われる。後述するように、国際通信社、信濃毎日新聞特別寄稿家と、風見のその後のジャーナリストとしての歩みには、いずれも土屋が大きく関わっている。

風見の工業之日本社での役職は、一九一七年一一月時点で「専務理事主筆[43]」であり、後年の手記には経営に携わっていたとある[44]。雑誌『工業之大日本』は創刊以来、「大日本帝国の工業界の為に力を致し、兼ねて其の忠実なる機関誌[45]」であることを目指しており、執筆者には経営者や技術者、研究者などが目立つ。『工業之大日本』で風見は社説や時事評論、海外文献の翻訳紹介などを担当し、署名記事は数える程度しかないものの、執筆記事はある程度特定できる。一九一九年四月号からは金太仁作にかわって風見が新たに『工業之大日本』の発行兼編輯人となり、翌年六月号までその任にあったが、この間一年ほど主筆の任務を滝孝三郎に委ねている[46]。一九二〇年七月号から山内峯太郎に発行兼編輯人が交代するが、風見は「客員」の肩書きで編集に関わり続け[47]、一九二〇年九月号からはじまる論説欄「工

業楮余録」は、その九月号の三本の論説に文責を示す「K」、あるいは「A・K」のイニシャルが記されており、また文体や用語などから風見の執筆であることが明らかである。[48]

『工業之大日本』で健筆を揮う中、風見は国際通信社大阪支社に入社する。須田禎一はこの入社を一九一九年とし[49]ているがこれは誤りで、一九二〇年の秋頃に入社したことが『称好塾報』から確認できる。[50]風見の国際通信社への入社は、一九二〇年五月に同社新聞部が開設[51]されたことに伴う抜擢と推測され、この時の新聞部部長は土屋元作だった。もっとも国際通信社入社後も、前述したように工業之日本社には客員として編集に関わっており、「工業楮余録」は両社に関わっていた風見のために設けられた論説欄と考えられる。「工業楮余録」は一九二一年一二月号まで続き、翌二二年三月号からは三回にわたる、ペンネーム「莫哀生」の「東京便り」にかわるが（六月号まで）、これは風見が一九二一年に国際通信社を退社し、同年末に大阪から東京に転居したことと一致する。このように見てくると、大阪朝日退社後の風見は雑誌『工業之大日本』とともにあったと言ってよいだろう。

2　「徹底せる武力」論から「自主的」軍縮論へ

『工業之大日本』で風見の最初の論説と考えられるのは、一九一七年七月号から三回にわたる「無辺生」の論説「戦後に対する準備の研究」[52]である。工業界の大戦景気が沸く中、いかに好況を維持していくかがこの論説のテーマである。この中で風見は中国や東部シベリアへの市場拡大の必要性を説いているが、これは水海道中学以来一貫する風見の主張である。大戦景気が継続する中で、風見は商工業のさらなる隆盛のために「人口都会集中」が一層進むことを期待[53]し、一九一八年六月号の「工業時事評論」では、「農業国」から「商工業国」への転換は「国家永遠の利益を確保し得べき運命」であり、日本にとって建国以来の「一大変革」[54]であると評価している。この時期の風見の文章には、

大戦景気の齎す高揚感とともに、商工業国家への転換に伴う都市化への期待に満ちている。

このような商工業重視の国家像は、同時に欧米諸国との対峙と表裏一体にある。一九一八年五月号の風見の署名入りの社説「所謂徹底せる武力」は、四月六日にウィルソン大統領がアメリカの参戦一周年と第三回自由公債勧誘開始のために行った、ボルチモアでの演説を受けて書かれたものである。ウィルソンはこの年の一月八日に一四カ条の平和原則を発表し、「正義」と「公正」に基づく「世界平和」の実現を謳い、そのための計画のひとつに軍備の縮小を挙げていたが、ブレスト＝リトフスクの講和成立後ドイツの攻勢が高まる中で、「武力！武力！徹底せる武力、無制限の武力、世界の法律を正当ならしめ、有らゆる利己的支配者を紛砕し去る王者堂々の武力あるのみ」[55]と、「徹底せる武力」の必要性を唱えていた。こうしたウィルソンの方針転換とも思える武力正当化論に風見は共鳴する。なぜならば、日清戦争以来日本が経験してきた「国礎の動揺」とその防衛は、国際秩序が「力の道理」によって支配されることを痛感させてきたからである。したがって「吾人は将来に於ても白人が過去に於ると同様の心情を以て有色人種を遇すべく、有色人種たる吾人の正当なる要求を貫徹せしめんとならば、常に徹底せる武力の準備なかるべからざるを主張せんと欲するなり」[56]。このような「白人」に対して「有色人種」の要求を貫徹していくという考えは、ほぼ同時期に唱えられた中野正剛の「極東モンロウ主義」[57]や満川亀太郎の「亜細亜解放」[58]論などと、問題意識を共有するものである。

一九二〇年一月に発足した国際連盟にも、風見は不信感をあらわにする。連盟は締約国に「戦争に訴へさるの義務」を課し[59]、軍縮を平和確立の前提条件に位置づけていたが、国際政治を「力の道理」が支配するものと捉える風見には、連盟がどれ程国際平和に貢献できるか甚だ疑問だった。連盟によって世界平和が保障されるとしても、それは「正義人道の精神が世界を司配するからでは無」く、「『拳骨の力』が幅を利かす」[60]からであった。

このように「徹底せる武力」の必要性を唱えていた風見ではあったが、一九二一年初頭からの論説では「武力」論の認識に大きな変化があらわれてくる。「国は何が故に強きか」。この課題について風見は、「第一線の軍備は教育[61]」であるとし、「良民第一義的の国防方針[62]」を立てるべきだとする。これからの「国防方針」は工業と農業の発展を支える「有能にして而して善良な人民」を育成し、産業発展の土台となる人材養成という「永遠将来の利害」に目標を据えるべきである。たとえ十年や二十年は日本の台頭すべき可能性が見込めないという意見が出たとしても、またこの間に「英吉利や米国がドンナに海軍拡張を行つたとしても愕くには足ら[63]」ず、日本は「良民」育成として「国民の実質的改造[64]」を目指し、教育に力を注ぐべきだと言うのである。

その一方で、当時アメリカからあらわれていた日英米三大海軍国間の軍縮については、「日英米海軍協定論を今日の世界的海権争覇戦抑止策として聴くのは、恰かも往年英独海軍協定論を英独海上争覇戦に際して聴かされたと同様の感じがせぬでも無い。世界戦の禍機此所に存すとも見られるし、また買ひ被られて居るの概がある日本としては飛んでも無い迷惑で、折角生産的平和事業に使用し得べき経費を非生産的事業の経費の為め削り取られる心配が湧いて来る」とし、「国家の命脈は武備に在るのでは無い。武備は国家の命脈をたもつための保護的設備に過ぎ」ず、「モット自主的（。点は引用者）に国家の永久なる繁栄の途を講ずることを高唱するのは今日の場合に於て決して無意義で無い[65]」と提唱する。

一一月からはじまるワシントン会議についても、英米両国の利益優先の会議であり、所詮「自分の都合のいゝときだけ、平和であつて欲しいといふ願念から起つて出た平和会議」に過ぎないと風見は見る。英米主導で形成されていく新たな国際秩序への不信感は、ワシントン会議においてさらなる反発へと進んでいることがわかる。「英米の二国がドンナに軍備を拡張して行つたつて構はないから、コチラだけは敢然として軍事費を削減して其の代り夫れを別な

方面にモツト有効に使用せよ」[66]。まさしく英米本位ならぬ、日本本位の「自主的」軍縮論の主張である。

しかし風見の「自主的」軍縮論は、単なる理想主義に由来するものではない。「今日の如き形勢の下に在つて戦争を行はずして戦因を芟除して行くことが果して可能であるか」という問いには否定的な考えを示す。そして戦争の可能性を今日否定しきれない以上、ワシントン会議の結果に委ねて事足れりとするのではなく、英米に不正義があれば「撲滅してみせるといふ意気込を大に養つて置く必要」があり、「今はたゞまつしぐらに国力充実に向つて突進するを要する折」だと言うのである。こうしたリアリティな視点に立った上で、「国力充実」の目的は「ただ正義の剣を何時にても抜き払つて不正義を膺懲」することにあるのではなく、「世界の文化を指導して行くの大任を遂げてみせるといふ目的」に置かねばならないと主張する。「国力充実」とは第一義的に「文化」国家への発展を意味し、そうした理念に立って初めて「真に正義の剣を揮つて世界を股にかけて国民的発展を期し得るもの」[67]だというのが、風見の「自主的」軍縮論なのである。

風見のこうした軍縮論の背景には、「吾人は不景気谷へとすべりおちつゝあるのだが、悲しいことには、何時何処まで行つたら其の谷の底に到達するかゞ判らぬ」[68]という、前年の三月からはじまった戦後不況の影響が理由として考えられる。見通しのつかない不景気の只中で、軍事費という「非生産的事業」に費用をつぎ込むことに風見は危機感を募らせる。大阪在住の工業専門誌に関わる風見には、深刻な不景気の実態がその眼に映じていたに違いない。「真の好景気は生産的事業のみに基礎づけられて、さうして始めて其の好景気には持続性独立性が生ずる」[69]という風見の言葉には、「生産的事業」によって国家の発展を目指す「工業人」のオピニオンリーダーとしての見識とともに、「不景気谷」のなかで苦しむ人びとへの眼差しを読み取ることができる。

3　労働問題への視線

『工業之大日本』誌上で風見が取り上げた重要なテーマのひとつに労働問題がある。一九一八年一一月のドイツによる連合国との休戦協定調印を受け、風見は社説「平和は来れり」[70]を発表する。「戦後に於て果して如何なる時代、如何なる時運が出現するか」。この問いに風見は、戦後の欧米では労働問題が社会の注目を集めていることを指摘し、「此の労働問題たるや、実に現代社会組織の一大欠点を表現したもの」と見る。「現代の欧羅巴及び亜米利加の社会は、何人も自由に活動し、何人も自由に幸福を獲得し、敢て他の掣肘を受けないと云ふのが其の社会を構成する根柢の思想」であり、こうした「自由の思想」に基づく資本家の自由な利益追求とそれへの反発が労働問題発生の要因だと風見は考える。ここから欧州のように労使対立が深刻化していない日本では、資本家は「使用人の幸福を大に増進するの方策を執るの義務」を持ち、一方使用人は「斯くの如く優遇さるゝの徳義に酬ゆる為に、其の従事する職業に大に努力奮励するの義務を守る」といった、労使相互の「義務」に根ざした「思想」によって社会を形成すべきだという結論を導き出す[71]。欧米の如き「自由の思想」とは異なった、資本の「徳義」に労働者の忠誠を担保する「社会組織」を築かねばならないと言うのである。しかし、このような経営の温情に基づく労使の協調といった労働問題に対する考えは、この後変化していく。

一九一九年に入ると、『工業之大日本』には労働問題に関する記事が増加していく。一九一九年四月号からは工業之日本社調査部による「労働問題研究資料」欄が新たに設けられ、「労働問題の発生する原因（一）」（一九一九年四月号）、「ノーウッド博士の意見」（一九一九年五月号）、「レヴァーハルム卿の六時間作業制論」（一九一九年六月号）、J・Bファース「英国の労働運動」（一九一九年一一月号）などの欧米の労働問題に関する研究や報告が相次いで紹介[72]されるが、この欄は風見が担当していたものと推測される。なかでも注目すべきは、一九一九年九月号の「労働問題研究資料　へ

ンダーソン氏は曰く」である。これはイギリス労働党の代表的人物で党首の経験もある、A・ヘンダーソンの論説を紹介するもので、以下のような趣旨である。大戦の終結とともに「思想の変革」が胎動してきている。これは一般民衆が「新たなる民主的自覚」をもつようになったことを示すが、こうした動向はイギリスのみならず、世界各国民の心情を支配している。そしてその「民主的思想」の根底にあるのは「平等」の観念であり、「自由博愛の精神」を基礎付けるものである。「彼の労働組合主義の目的とする所も、亦最初より此の『平等』を根柢としたる社会組織の実現に外ならない。政治的民主主義の熱望する所も亦此の『平等』の実現に在る[73]」。

イギリス労働党は大戦中の一九一八年二月の党大会で、新規約を採択して社会主義政党であることを明確にするが、この規約の作成に関わったのがA・ヘンダーソン[74]だった。六月の党大会では、党綱領「労働党と新社会秩序」を採択して四つの政策規準を示すが、その中の「国家財政の革命」は、最高額が没収に等しくなるまでの累進率の高い所得税を要求[75]するもので、ナショナル・ミニマムの政策などとともに所得形成後の富の再分配を目的としていた[76]。このように社会主義政党であることを鮮明にしはじめたイギリス労働党の政策に、風見は少なからぬ影響を受ける。中野正剛主宰の雑誌『東方時論』一九二〇年四月号に、風見は「削富減貧の一策としての対個人所得税論」と題する論説を寄せ、扶養家族控除の新設や免税点の引き上げなど少額所得者への負担軽減を図った原敬内閣による所得税法改正案を「削富減貧」の観点から批判する。一家の総所得を標準として課税額を決める現在の原則を改めて、家族の総所得をその構成人数によって算出した一人あたりの所得額に対し、「一人の人間が相当に暮して行けるだけの経費」と同一額の所得を免税点とし、それ以上の所得については累進性を高めて課税すべきことを提案する。これら「削富減貧」をはかり、「負担の公正」を徹底させた所得税法へと改めるべきだという風見の問題提起は、「文明施設の目標は何人も相当に暮して行けるといふ社会をつくり上げるに在る、而して此の目標に近寄る為には、出来るだけ富の均

等する分配を謀らねばならぬ」[77]という理念に裏打ちされており、これはまさにイギリス労働党の新綱領をモデルとした政策論であった。

風見の提起する「一人の人間が相当に暮して行けるだけの経費」という観点は、さらに『工業之大日本』一九二〇年六月号の署名入り論説「労力と資本とに就いて」で、より理念的に論じられている。労使間の利益分配に関する「不公正なる事実」を軽視して労使協調を唱えるのは木に縁って魚を求めるようなものであり、「労力の提供者」の側に軸足を置き、「一人の人間を生活させて行くといふ見地」[78]に立った「平等」論を風見は主張する。ここに「徳義」と「忠誠」に基づく労使協調論は否定され、「平等」論に立って労働者の生活を守るという考え方へシフトしていることがわかるだろう。

『工業之大日本』一九二〇年九月号から始まる「工業楮余録」欄でも風見は労働問題を繰り返し取り上げ、一〇月号では、労働問題の焦点が賃金値上問題から失業問題へと転換していることを指摘する。この年大阪府では約二〇〇の工場が閉鎖され、三五〇〇人が解雇されるなど[79]、三月から始まった戦後恐慌は失業問題を深刻化させ、賃金値上げ問題の段階とは違って「自ら沈痛味を帯」びさせていた。「此の苦悶によつて被傭者達が如何なる心理状態に誘導さるゝに至るかの問題は特に慎重なる考察を要する」[80]と、風見は労働問題の先行きに注視する。

一方ヨーロッパに視線を転ずれば、フランスで社会党の幹部が労働者の要求を貫徹するために政治的ストライキの採用を決議し、イタリアでは労働争議が政治経済および社会組織を根底から覆そうとしており、イギリスでは直接行動主義が台頭し、議会の権威を蹂躙することを正当だと主張している。欧州情勢をこのように分析する風見がとくに注目するのは、イギリスの労働運動である。革命以来ロシアへの干渉を続けていたイギリスでは、ポーランド・ソビエト戦争でポーランドが苦境に追い込まれたため、その支援のための対ソ干渉戦争に踏み込む可能性が生まれてい

た。こうした新たな戦争勃発の危機に直面して労働諸団体が行動委員会を結成、一九二〇年八月九日にはその協議会が発足し、イギリスが介入する場合には組織労働者が全力で対抗することを声明した[81]。この動きを風見は一九二〇年一一月号の「工業楮余録」欄で、戦争防止のために組合労働者の全勢力を使用する決議案が通過したことを報じるとともに、次のように評価した。

「右の会合（八月九日の協議会発足の際の会合―引用者）は英国が露国に対して波蘭を援助するの行動に出づるを妨げんとする主趣に基いて開催されたものであつて、此の一事は英国政府を掣肘する為めに労働者はあらゆる力を用ゆべしとし労働者の要求を貫徹せしむる為めには国会及び之れを基礎とする政府の権威も亦之れを蹂躙するを敢て辞すべきにあらずとする所謂直接行動派の勢力が漸く英国労働界の大勢を左右するに至れるを語るものとして多大の意義あるエポック・メーキングの出来事である[82]」。

イギリスでは直接行動派が労働運動の大勢を占め、ついには戦争の危機を回避するまでに至ったことに風見は注目する。当時日本でも労働運動の方針をめぐり、議会政策派と直接行動派とが別れ、この年一〇月の友愛会第八周年大会は、まさに両者の激しい対立となった[83]。風見は直接行動派がヨーロッパで拡大しつつあることに注目し、労働運動におけるサンジカリズムの台頭は必然の成行と見ていた。日本でも翌一九二一年六月から八月にかけて川崎・三菱神戸造船所の争議が起こり、その敗北後サンジカリズムの全盛時代となった[84]。風見が暮す大阪では労働争議が飛躍的に増加し、「ストライキの年[85]」を迎えていた。眼前で起きている労働争議はまさしく世界的連環の中にあることを風見は確信したに違いない。このような状況の中で風見は政治への接近を決意していく。

三　転機としての一九二二年

1　議会政治への懐疑

一九二二年は風見にとって、前年末に九年におよぶ大阪での生活に終止符を打ち、活動の舞台を東京に置くことになった年である。一九二一年の秋頃に国際通信社を退社した風見は一二月には上京するが、これにはいくつかの理由が考えられる。まずひとつは、戦後不況の煽りを受け、一九二二年一月の国際通信社新聞部の閉鎖[86]が決まったことである。おそらく風見は閉鎖を前に退職を決意したのであろう。二つ目の理由は新聞社経営への乗り出しである。この年の春頃から、風見は水戸で茨城日日新聞の創刊に関わりはじめる[87]。須田禎一が、国際通信社の「退職金を資本として三輪車のパテントをとり、大いに金をもうけて自ら新聞社を興す計画を樹てたが、みごとに失敗した[88]」と書いているのは、このことであろう。風見がつくろうとした茨城日日新聞については具体的なことはわからないが、『工業之大日本』での論説活動に自信を深めるとともに、限界を感じていたのではないだろうか。工業之日本社では論説を担当したものの、内容も読者も限られた工業誌には限界があったであろうことは想像に難くない。また中野正剛が代議士の傍ら東方時論社を主宰し、雑誌『東方時論』が論壇誌として注目を浴びていたことも新聞社経営を決意した理由であろう。そして三つ目の理由が、政治への接近である。

風見の上京とともに、『工業之大日本』の「工業楮余録」の連載は一九二一年一二月号で終了する。続いて一九二二年三月号の『工業之大日本』から「莫哀生」による連載「東京便り」がはじまるが、これが上京した風見の評論であることは「工業楮余録」と同じ誌面構成の点から言っても明らかである。その三月号の第一回[89]には、「東京は政治

の都である。随つて政治季節に入れる今日」[90]とあり、上京が「政治」に関わるものであることを暗示させている。

風見は前年から「工業楮余録」で、政党政治の悪弊を繰り返し論じるなど政治への不信を強めていた。たとえば一九二一年四月号では、「『議会をして侮辱の対照物たらしめよ』とするレニンをして日本今日の議会制度運用の状を見せしめば、彼はた(ママ)何と之を評するだらう。あらゆる醜態を国民の前に暴露しながら、議員自身は国民に（略）議会を基礎とする政府を信頼せよと強ゆるだけの勇気があるだらうか」[91]と、レーニンに仮託して日本の議会政治を批判している。

風見の見るところ議会政治の問題とは、ひとつに、代議政治が「選挙政治」である以上、当選は金銭次第という事情[92]があること、ふたつめに、政党政治家たちは「政党への忠義心」を何よりも優先させるため、国民の要望や自らの政見よりも政局優先で議会での投票行動を決めざるを得ないことにある。したがって「大多数の日本人……随つて身心ともに最も健全なる国民の大多数は『国民のための政治』が『政党のための政治』よりも軽視されて居るといふ事実を痛切に感じつゝあるのだ」。もっとも議会政治が露呈する行き詰まり状況は日本だけの現象ではなく、イギリスでもフランスでも顕著に見られるのであり、このことがイギリスで「直接行動」の台頭を招くことになった要因だと風見は論じている。「直接行動の発生を余儀なからしめたやうな英国の立憲政治が模範だとは、何といふおそるべき危険思想であらう！それを亦考察してみやうともせずに太平楽をきめ込んで居る日本の政治家達は、何といふ危険人物であらう！」[93]と憤るのだが、この憂いは一年後の「東京便り」で、さらに深刻な問題として論じられている。

「議会政治の模範国を以て許さるゝ英国に直接行動派あるは、議会政治組織が英国に於て一大不信任案を投げつけられたるを語るものに外ならず（略）今日に於ては『政党政府の存立する所には常に必ず政治的腐敗の事実あり』とて、英国の政党政治を呪ものもあり。政党政治は畢竟買収政治に外ならず、政党の存する所議会は国民の利害についての公論の府にあらずして、

一党一派の私利をはかる私論私議の醜き争闘場に外ならずとの非難さへ英国には既に起つてゐる[94]」。

翻って日本の議会政治に眼を転じれば、高橋是清首相による内閣改造問題で政界は対立と混乱に明け暮れている。「斯んなことに力瘤を入れて騒ぐほどの余裕があるならば何故モット政治を実生活組織に触れさしめるやうに早く片づけて呉れぬのだらう」。風見は党人政治家という「プロフエツシヨナルな政治界策士」の手によって政界が左右される現状を憂い、農務省や工務省を新設して国民に密接した政治の実現を求める。政治のあるべき姿とは、問題が発生して、仮に内閣の意見と対立したとしても、「農商務大臣が逸早く大阪といふ商工業の中心地へ出かけて行つて商工界の第一線に働いてゐる人達と膝を交へて抱負を語り合つた揚句、去就を決する」というあり方なのである。実際に「国民の実生活」は、東京周辺の農村をめぐってみれば不景気の只中にあることがわかる。「農村の景気が悪くなるとすれば、日本のほんたうの不景気が始まったことになる[95]」にもかかわらず、政治の実情と「国民の実生活」は著しく乖離している。このように政治の現実に危機感を募らせる風見は、かかる現状を打破し、政治を「国民の実生活」と結びつけるための行動が必要だと考え始めていた。まさにその政治的実践の試みが又新社の結成であった。

又新社について検討する前に、「東京便り」終了後の風見の言論について触れておこう。「東京便り」は前述のように一九二二年六月号で終了し、かわって土屋元作の斡旋[96]で、『信濃毎日新聞』の特別寄稿家へと言論の舞台を転じていく。ここで風見は一九二二年六月一六日付の「読書日記」を皮切りに、翌二三年一月七日の主筆就任まで断続的に三八本の論説を発表する。風見の信毎主筆への就任は、特別寄稿家時代のこれらの論説の評判が高かった[97]からであるが、あわせて『工業之大日本』での論説経験が評価されたことによるものであろう。

2　又新社の結成

一九二二年七月中旬、風見は中野正剛らとともに政治結社又新社を結成する。又新社の名称は、『大学』の「日新日又新」に由来し、中野正剛、風見章、桝本卯平の三人が発足に関わった中心メンバーである。桝本は一九一九年一一月の第一回国際労働会議労働代表であり、風見にとっては称好塾の先輩にあたる。この三人に、満川亀太郎と三木喜延[98]を加えた五人が常任幹事[99]である。いずれも東方時論社の社友で、しかも桝本を除いた四人は早稲田大学の出身者（満川は中退）である。中野と満川は一九一八年一〇月に結成された老壮会のメンバー[100]であり、また翌一九年八月結成の改造同盟でも行動を共にしている[101]。

中野正剛の起草による「又新社宣言」によれば、又新社は「国民自らが革新の原動力」となり、「国民と背馳せる職業政治の羈絆を解脱[102]」することを目的としているが、その結成については、前年以来の「政界革新」の潮流の中で捉える必要がある。一九二一年初頭の第四四議会以来普通選挙をめぐり、「政界革新」、「既成政党打破」の気運の下に政党再編成の動きが進み[103]、翌二二年三月二四日に革新倶楽部の組織化となって結実した。中野正剛は革新倶楽部の宣言規約草案を起草[104]するなどその設立の中心的議員の一人で、四月からは地方組織の発会に関わっていた。その革新倶楽部宣言案では、「一切既成政党の気習を脱し広く天下民衆と握手して現状打破、党弊刷新の旗幟を樹[105]」てることが目指されたが、一一月八日の結成に至るまで革新倶楽部は組織方針と国民党の解党をめぐり、実に半年以上にわたって模索と混乱、対立を繰り返していく[106]。このように「政界革新」が政治の中心的テーマとなる中で、風見は政治への接近を決断し、東京へと移ったのである。もっとも風見が中野に同調して革新倶楽部に関わった形跡は見られず、革新倶楽部に重心を置く中野と違い、風見は又新社を通して「政界革新」の可能性を探っていたのである。

又新社のねらいは既存の政党に顕著な上からの組織体制を打破し、賛同する同志たちを同心円状に結合して「国民

運動」へと発展させることにあった。「職業政治」の打破に共鳴する同志らがそれぞれに小さな団体をつくって運動をはじめ、又新社を核に「大きい力」[107]に作り上げていこうというのである。風見の説明によれば、又新社は「国民各個の目ざめたる力を打つて一丸となし、それを土台として『国民大』の足場をつくる、といふのは真に国民の、国民のための、国民によつての国民主義を樹立」[108]することに意義があるとされた。この又新社の運動論には、サンジカリズムの台頭の中で立ち上る労働者の姿が重ね合わされていると言ってよいだろう。

又新社の実践活動は、「主として重大問題を捉へて、随時に特殊の団体を組織し、又新社員は其団体を構成する一分子となつて、特殊問題解決の為に努力する」[109]こととされた。そしてその活動の一環として、まず対露問題が取り上げられた。この年から翌年にかけて、シベリア撤兵とソ連承認問題が政治のひとつの焦点となっており、中野正剛は新人会や暁民会などによる対露非干渉演説会に参加し、また議会でソ連承認を促す演説をするなど、対露問題を重要な政治課題と位置づけていた。[110]又新社の対露問題への取り組みは、日露間の通商促進をはかるため、極東共和国国営通信社ダリタ通信員アントーノフとの会見や講演会として行なわれた。九月一八日に開催された講演会は「対露外交を官僚の手から民衆の手に移」[111]すことを唱え、一五〇〇人の聴衆を集めた。予定されていたアントーノフの講演は警視庁から過激思想の宣伝とされ、開催当日、正力松太郎官房主事から出演中止を命じられた。[112]そのため講演会はアントーノフを欠いたまま、風見の司会で三宅雪嶺、桝本卯平、中野正剛、満川亀太郎の講演が催された。[113]

一方、又新社が目指す「国民運動」の地域での実践は、茨城県水海道町から始まった。これは八月六日に水海道中学で同窓会が開催されるため、それにあわせて又新社が講演会を開いたものである。[114]無論、これは風見が執り行ったことは言うまでもなく、その開催には又新社員で水海道中学の同期古井岩三郎の尽力があった。講演会は中野、桝本、緒方竹虎の三人が演壇に立ち、終了後には歓迎会が開かれた。その後、桝本、中野、風見の三人は下妻町へ行き、又

新社の同志らと意見を交換し、翌七日の帰京途中には足利市の同志と打ち合わせを行った。この月は福井、大野、勝山に中野が出向き、座談会や演説会を開催し、仙台でも、中野、桝本、満川による講演会が催された。仙台では「既成政党の政談演説会以外に、日本革新運動といつたやうな根本的問題を提げて立つたのは、同地では最初」[115]のことだったという。九月に入ると、千葉県君津郡環村に中野が招かれて講演し、青年会長らによって南総八カ村聯合の南総又新社の結成が目論まれ[116]、広島でも呉又新社からの要望で、中野、桝本による講演会が開催された。一〇月には茨城県村松村（中野・風見演説）、神田青年会館（中野、三宅雪嶺、馬場恒吾演説）で講演会[117]が催されている。この間、九月八日には在京又新社員の会合が東方時論社で開かれ、対露問題、対中問題、物価問題等を論議し、又新社社則を議決している。この日の会合に集まったメンバーは、緒方竹虎、中村與資平、永田稠、栗生鴻之助、片山光次、長野朗、木村富蔵、野溝伝一郎、桝本卯平、満川亀太郎、中野正剛、風見章、三木喜延に「有力なる匿れたる同志」[118]だった。

しかし『東方時論』を見る限り、一一月に入ると、その活動の実態がほとんど記載されなくなる。活動が休止状態になったと見られる。その理由としてまず、一一月八日に結成された革新倶楽部に中野が参加し、又新社から活動の重心が移ったことが考えられる。三月に革新倶楽部が組織された直後中野は倶楽部員に、たとえ政党を結成することがあるとしても、それ以前に「天下民衆と握手して既成政党を打破し、政界を革新せねばならぬ」[119]と説いており、革新倶楽部の政党化を見据え、国民運動の展開を狙っていた。八月の末、国民党の解党期日が迫るなか、「桝本卯平氏等の又新社は倶楽部の中心勢力となつて働くらしい」[120]と『読売新聞』は報じているが、これは中野に近い筋からの情報に違いない。革新倶楽部を通して政治の革新を目指していた中野からすれば、又新社はその結成前の政界革新運動の前段階に過ぎなかった。それゆえ知名度の高い中野の活動の比重が革新倶楽部へと移ることは、又新社にとっては致命的であった。

また「国民主義」の基盤となる地域での活動を見ても、たとえ各地で講演会などが開催されても、それが起点となって地方組織の結成へと結びつくことはほとんど見られなかった。前述した風見の地元水海道町でも、又新社の継続的な組織化がはかられた形跡は見られない。風見に即して言えば、母校の同窓会を発起に組織化を試みたのであろうが、具体化されるまでには至らなかった。後年の風見の選挙を支えるような強固な支持基盤はまだこの時点では形成されず、「国民運動」とは程遠いものだった。

七月以降、講演会活動や『東方時論』の記事執筆と、半ば又新社の専属のごとく関わっていた風見だったが、翌一九二三年一月七日信濃毎日新聞主筆に就任する。又新社の活動を始めた夏頃から風見の生活状況は厳しさを増し、前述の信濃毎日新聞への寄稿で糊口を凌ぐ状態だった。この頃、信毎社長の小坂順造より主筆就任への打診があったものの、「困苦欠乏の境涯に沈淪はしてゐたが、信州に行つて筆で生活する気持にもなれ」[121]ず、辞退していた。新たな志を持って大阪から東京に移ったものの、一年も経たずに信州に行くのは「都落ち」の気分だったのだろう。風見が小坂から主筆就任の再度の要請を受け信州行きを決断するのは、又新社の活動がほとんど見られなくなった一二月のことだった。

一九二三年一月一〇日、信州へ向かう風見の送別宴が中野正剛主催で開かれ、頭山満、小坂順造、緒方竹虎、満川亀太郎、安藤保太郎、桝本卯平、木村富蔵、弓削田精一、栗生鴻之助、三木喜延らが参集した[122]。ここには風見と関係の深い顔触れが勢揃いした感があるが、中野、緒方、満川、桝本、木村、栗生、三木といった又新社の主要メンバーが集結しているところを見ると、この送別会は事実上の又新社の解散式に他ならなかった。

おわりに

一一月八日に革新倶楽部が結成され、又新社の活動が衰退していく中、風見の関心はイギリスに向けられていた。イギリスでは一〇月二三日、ロイド・ジョージ内閣の総辞職によりボナ・ロー保守党内閣が誕生し、一一月一五日の総選挙では労働党が一四二名の当選者を出して第二党の座を獲得するに至った。第一次世界大戦終結から四年、イギリスはまさに転換期を迎えていた。イギリスの情勢を見つめる風見は、一一月から一二月にかけて信濃毎日新聞紙上でイギリスに関する三つのテーマの論説を連載した。ギルド社会主義者のA・J・ペンティの評論（一一月二日～八日、五回の連載）、イギリス労働党（一二月五日～一二日、四回の連載）、そして代議政治への不信と政治的無関心（一二月二二日～二八日、五回の連載）についてである。ここでは風見が取り上げるペンティの評論について若干検討し、次への問題提起としたい。

風見によれば、イギリスの資本主義は原材料を輸入して工業製品を輸出するという貿易構造によって発展してきたものの、大戦後は原料供給国での工業化が進み、ついにその構造が崩れ始めてきた。しかも大戦で海外債権の大部分を失ったため、「イギリスの工業が従前の如くに多数の国民に職業を与へ得ぬといふ結果となる」。したがって、「海外市場に依頼するイギリス工業はだん〳〵と、沈滞して行くべき筈のものである。自然失業者は殖える食へぬ人間が多くなる」。このように捉えた上で、風見はペンティの次の「予言」を紹介する。

「イギリスがロシアや中央ヨーロッパの歩めるあとを趁ふて野蛮主義と無政府とへ行くか、それとも或種の共同的な又は共有的な基礎の上に改造さるゝか、その二途の何れであるかを決定すべき重大なる時機が到来するだらう」[123]。

ペンティは資本主義の拡大に伴う「重工主義」は行き詰まり、「新しき時代」が到来すると見るのだが、それは「国際競争に代ふる国際協力を以てする必死的帰結は、農業の復興である。何となれば夫れは出来るだけ社会を自立自存させやうとする思想の復帰である。そして斯の如き社会は、必然農業の上に基礎づけられるからである」[124]。このように風見は信州の読者に向って、世界に「新しき時代」が到来しつつあることを説くのである。

ギルド社会主義[125]はフランスのサンディカリズムの影響を受けた社会理論であるが、労働運動の場面でサンディカリズムが高まるなかで、風見はギルド社会主義の代表的論者ペンティの評論に注目したのだろう。もとより風見がギルド社会主義を信奉するようになったというわけではないが、ペンティの説く「共同的な又は共有的」な考え方に基づく社会改造には共鳴する点が少なくなかったに違いない[126]。信濃毎日新聞時代から風見の論説に農業に関するテーマが多くなっていくのは、単に工業誌から信州の日刊紙へと言論の舞台が移ったからというだけではなく、「新しき時代」が「共同的な又は共有的」に改造された「農業の復興」にあることを確信したからに他ならない。

付記　本稿は、二〇一二年三月四日に茨城県常総市主催・早稲田大学大学史資料センター後援で開催された「名誉市民『風見章氏』生誕一二五年没後五〇年記念『時代の先駆風見章展』」での講演「風見章の目指したこと」を基に、新たにまとめ直したものである。

本稿をまとめるにあたり、風見章の長男風見博太郎氏、志冨靭負の長男志冨實氏、常総市役所の染谷佳男氏、日本学園の小川和夫氏、宮原洋一氏に、お力添えをいただきました。ここにお礼申し上げます。

註

（1）北河賢三・望月雅士・鬼島淳編『風見章日記・関係資料』みすず書房、二〇〇八年、一六～七頁。

（2）『読売新聞』一九三七年六月三日付。

（3）前掲『風見章日記』五五頁。

（4）いわゆる「革新」派については、伊藤隆『大正期「革新」

派の成立』塙書房、一九七八年参照。近年の「革新」の運動と思想に関する研究では、塩崎弘明『国内新体制を求めて』九州大学出版会、一九九八年が参考となる。

（5）風見章「回想記　中学時代一」、「風見章関係文書」早稲田大学大学史資料センター所蔵（風見翔平氏寄贈）。

（6）中野は修猷館中学四年の時、同窓会雑誌第四号（一九〇三年一二月号）に「西郷南洲先生の片影」を寄稿している（中野泰雄『アジア主義者中野正剛』亜紀書房、一九八八年、一五頁）。一九四三年一〇月に中野が自殺した時、机上には雑賀博愛『大西郷全伝』二巻が広げられていたことはよく知られている（中野泰雄『政治家中野正剛』下、新光閣書店、一九七一年、一七頁）。

（7）もっとも、英雄としての西郷隆盛について成人してから風見が語ることはほとんどなく、生涯を通じて西郷に心酔し続けた中野正剛とは対照的である。

（8）風見章「回想記　中学時代二」、「風見章関係文書」。

（9）風見章「吾人青年の覚悟」『済美』第一号（一九〇五年七月号）、三四頁。茨城県立水海道第一高等学校所蔵。

（10）同右、三五頁。

（11）同右、三五～六頁。

（12）同右、三六頁。

（13）三国干渉が風見の同世代者に少なからぬ影響を与えたことは、たとえば満川亀太郎（一八八八年一月生。早稲田大学中退）を見ても明らかである。満川にとって「三国干渉は実に私に取って物心を附いて以来、欧洲が亜細亜に加えたる脅迫の最初のものであり同時に最大のもの」（満川亀太郎『奪はれたる亜細亜』広文堂書店、一九二一年、二頁）であった。少年期のこの屈辱感が後の満川のアジア主義運動の原点となっていく。

（14）前掲「吾人青年の覚悟」三六頁。

（15）風見章「回想記」（早大時代）、前掲「風見章関係文書」。

（16）同右。

（17）早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第二巻、一九八一年、一六頁。

（18）当時の早稲田の学費は月額で高等予科が二円五〇銭、大学部は三円だった。同右、一〇〇四頁。

（19）風見は大滝淵一郎について、「水戸中学から第一高等学校を経て東京帝国大学の政治科を卒業し、大学時代に称好塾の塾長をつとめたものの、後に放縦の生活に流れ、不運にもうぶれて行商人に転落し浅草の貧民街に住んでゐた。そして乞食の如き惨めな死方をした」と述べている（前掲「回想記」（早大時代）。

（20）前掲風見「回想記」（早大時代）によれば、一九〇八年の春まで称好塾に通ったとしているが、早稲田卒業年である一九〇九年に入ってからも、風見は称好塾の諸行事に参加している。『称好塾報』一九〇九年一二月四日号、日本学園所蔵。以下、特に明記しない限り、『称好塾報』は日本学園所蔵本による。

(21) 『毎週雑誌』は内塾友の寄稿と、外塾友からのさまざまな報道により構成されていた。『称好塾報』一九〇五年一二月号、一五頁。

(22) 中野、緒方、上原三郎、阿部真言の四人で、同県人による自炊生活が小石川の茗荷谷で行われていたという。前掲『政治家中野正剛』上、七二頁。

(23) 風見章「東筑摩行一」『信濃毎日』一九二三年三月一二日付。

(24) 風見章「明治奇人伝」『中央公論』一九五九年九月号二六五～六頁。

(25) 『文化茨城』第一六号、一九四八年三月一五日号。文化茨城縮刷版発刊委員会編『文化茨城縮刷版』一九七五年、三一頁。『文化茨城』は、風見章に私淑し私設秘書などをつとめた志富靭負が、戦後水海道で発行していた地域誌である。

(26) 文部省学生部『日本改造運動』上、一九三四年、四～五頁。

(27) 一九四四年四月一〇日の頭山の葬儀に際し、風見は次のように日記に記している。「偉大なる存在なりしが、此の人と共に此の人の希望せる如き日本は、間もなくその終結を告ぐるに非るかと思はる」（前掲『風見章日記』二五〇頁）。

(28) 前掲『アジア主義者中野正剛』三八頁。

(29) 前掲「回想記」（早大時代）。

(30) 須田禎一『風見章とその時代』みすず書房、一九六五年（一九八六年三刷）、二四頁。

(31) 前掲『政治家中野正剛』上、八三頁。

(32) 猪俣敬太郎『中野正剛の生涯』黎明書房、一九六四年、四三頁。

(33) 前掲『アジア主義者中野正剛』五四頁。

(34) 前掲『風見章とその時代』（二一〇頁）は一九〇九年としているが誤りで、一九一〇年一二月一日の入営である。水海道在郷軍人団慰問部「在営軍人慰問品発送録」（個人所蔵）参照。なおこの資料は、志富實氏のご教示による。

(35) 一九一三年春まで勤務していたことが確認できる。『称好塾報』一九一三年一二月号、回想杉浦重剛編集委員会編『回想杉浦重剛』杉浦重剛先生顕彰会、一九八四年、五〇六頁。

(36) 風見章「旭街雑信一」『信濃毎日新聞』一九二三年一月一四日付。

(37) 『新聞年鑑』一九二四年版（新聞研究所、一九二四年）には、一九一六年の退社（四二頁）とあり、また前掲『政治家中野正剛』上は一九一六年一二月一二日付の退職とする（二一六頁）。なお、前掲『風見章とその時代』には一九一七年五月の退社とある（二〇～一頁）。

(38) 風見章「序」。中野泰雄『父・中野正剛伝』新光閣書店、一九五八年、五頁。

(39) 同右、二七六頁。

(40) 「編輯室より」『工業之大日本』一九一七年七月号、八四頁。

(41) 土屋元作は一八六六年豊後国に生まれ、一八八五年冬に東京専門学校三年に編入したが、翌年三月「満二十歳独立論」を唱え、退学した。土屋大夢『記憶を辿りて』(復刻版)ゆまに書房、二〇一二年参照。なお土屋は一九〇五年度の早稲田大学推選校友となっている。

(42) 土屋元作「『工業之大日本』に対する希望」『工業之大日本』一九一七年七月号、一二頁。

(43) 『早稲田大学校友会名簿』一九一七年一一月。

(44) 前掲『風見章日記』一八頁、五五頁。風見と工業之日本社との関係については、これまでほとんど知られておらず、今日風見の評伝として定評のある、前掲『風見章とその時代』でも、編集を頼まれてやっていたが、小遣い銭位にしかならなかったと記載されているのみである(一二三頁)。

(45) 前掲「編輯室より」八四頁。

(46) 工業之日本社の組織改造や新計画の実現、さらには本社移転などが重なり、多忙だったことがその理由だという(「編輯室雑記」『工業之大日本』一九二一年九月号、三四〜七頁)。滝孝三郎は滝廉太郎の実弟で、一八九三年に生まれ、大阪高等工業学校卒業後、京都帝国大学へ勤務した。妻は土屋元作の長女である(大分県教育庁文化課編『大分県先哲叢書　滝廉太郎資料集』一九九四年、三二七頁)。

(47) T生「編輯室雑記を読みて」(『工業之大日本』一九二一年一〇月号)は、前号の「一記者」による「編輯室雑記」への応答記事である。この「T生」とは滝孝三郎のことだが、この中で滝は「編輯室雑記」の執筆者「K氏」について、次のように述べている。「Kさんは政界の新人中野正剛さんのクラスメートで互に相許す親友である、だから中野さんの立候補の時も、わざ〳〵福岡まで応援演説に出かけて行つて、現代の腐敗政治を油に譬へ之にたかる職業的政治家を油虫だと痛罵して博多人士を煙に捲いた人である、(略)僕の観る所では、Kさん自身としては政界の方面に一向に野心を持つて居られんやうである、否寧ろ退いて田園の哲学者を以て理想とするといふやうなことを云つて居られたやうだ」(五九頁)。

(48) 風見の文章は後年に至るまで、「シカモ」などの一部副詞をカタカナで書き、「支配」を「司配」と書くなどの特徴がある。このような用語が「工業楮余禄」には散見される。

(49) 前掲『風見章とその時代』二一一頁。

(50) 『称好塾報』一九二〇年八月三〇日号の「塾生動静」には、工業之日本社に勤務とあり、続く同報一九二〇年一二月一日号には「今般主として国際通信社大阪支社新聞部を担当し、工業之日本社に客員として尽力せらる」(一五頁)とある。また一九一九年一一月発行の『早稲田大学校友会名簿』では、勤務先は「工業之日本社」となっている。

(51) 通信社史刊行会編『通信社史』一九五八年、一二〇～一頁。
(52) 「無辺生」は『工業之大日本』一九一八年二月一日号から「工業家ノ日記帳ヨリ」を連載するが、その自筆題字と署名は風見の筆跡である。
(53) 「工業家ノ日記帳ヨリ」『工業之大日本』一九一八年四月号、四六頁。
(54) 風見章「工業時事評論」『工業之大日本』一九一八年六月号、三頁。文末に「風見生」の文責がある。
(55) 『東京朝日新聞』一九一八年四月九日付。
(56) 風見章「所謂徹底せる武力（社説）」『工業之大日本』一九一八年五月号、三頁。この論説の末尾には「風見生」と文責がある。
(57) 中野正剛『講和会議を目撃して』東方時論社、一九一九年、八一～五頁。
(58) 前掲『奪はれたる亜細亜』二頁以下。
(59) 「国際連盟規約」外務省編『日本外交年表並主要文書』上、原書房、一九六五年、四九三頁。
(60) 「工業楮余録」『工業之大日本』一九二一年一月号、二頁。
(61) 同右、三頁。
(62) 同右、一九二一年二月号、三頁。
(63) 同右、三頁。
(64) 同右、一九二一年一月号、三頁。
(65) 同右、一九二一年二月号、三～四頁。
(66) 同右、一九二一年一〇月号、三頁。
(67) 莫哀生「東京便り」『工業之大日本』一九二二年三月号、六八頁。
(68) 同右、一九二一年二月号、二頁。
(69) 同右、三頁。
(70) 目次欄の題目に風見章の署名がある。
(71) 風見章「平和は来れり（社説）」『工業之大日本』一九一八年一二月号、八二～八五頁。
(72) 「労働問題研究資料」は一九二〇年一二月で終了し、翌二一年一月号から八月号までは、モールス・ウオース「社会主義を呪ふ」が連載される。
(73) 「労働問題研究資料　ヘンダーソン氏は曰く」『工業之大日本』一九一九年九月号、六～七頁。
(74) 松浦高嶺・上野格『イギリス現代史』山川出版社、一九九二年、一五六頁。
(75) 関嘉彦『イギリス労働党史』社会思想社、一九六九年、一〇四頁。
(76) 北西允『イギリス労働党史論』広島大学政経学部政治経済研究所、一九六八年、一一六頁。
(77) 風見章「削富減貧の一策としての対個人所得税論」『東方時論』一九二〇年四月号、九八～一〇〇頁。
(78) 風見章「労力と資本とに就いて」『工業之大日本』一九二〇年六月号、二～四頁。
(79) 大阪地方メーデー実行委員会編『大阪労働運動の歴史』

労働旬報社、一九七一年、七一頁。

(80) 「工業楮余録」『工業之大日本』一九二〇年一〇月号、二頁。

(81) G・D・H・コール『イギリス労働運動史Ⅲ』岩波書店、一九五七年、二二二頁。村岡健次・木畑洋一編『イギリス史』3、山川出版社、一九九一年、二八三～四頁。

(82) 「工業楮余録」『工業之大日本』一九二〇年一一月号、二頁。

(83) 二村一夫「労働者階級の状態と労働運動」『講座日本歴史』18、岩波書店、一九七五年、一一九頁。

(84) 同右、一一九頁。

(85) 前掲『大阪労働運動の歴史』七一頁。

(86) 前掲『通信社史』一二〇～一頁。

(87) 『称好塾報』一九二二年六月三〇日号、一八頁。

(88) 前掲『風見章とその時代』二四頁。

(89) 文末に一月二〇日に書かれたことが示されている。

(90) 前掲「東京便り」『工業之大日本』一九二二年三月号、六五頁。風見章「議会政治に対する感想」(『東方時論』一九二三年一月号)の冒頭でも、「また政治季節にめぐりあふた」(八七頁)と書いている。

(91) 「工業楮余録」『工業之大日本』一九二一年四月号、三～四頁。

(92) この点は前掲「議会政治に対する感想」でも、「われ等を現に司配してゐるところの選挙的議会政治組織なるもの」(八七頁)について論じている。

(93) 同右、一九二一年五月号、三頁。

(94) 前掲「東京便り」『工業之大日本』一九二二年三月号、六六頁。

(95) 「同右」『工業之大日本』一九二二年六月号、四五～六頁。

(96) 『信濃毎日新聞』一九二三年一月一五日付。前掲『風見章とその時代』は緒方竹虎の推薦によるものとしているが(二五頁)、誤りである。

(97) 風見章手記「信毎時代」、前掲『風見章日記』四九二頁。

(98) 三木喜延は一八九四年三月生で早稲田大学政治経済学部卒。東方時論記者を経て一九二二年から東京朝日新聞社連絡部員。『新聞人名鑑　昭和五年版』『新聞人名辞典』第三巻、一九八八年、日本図書センター、七九頁。

(99) 風見章「又新社記」『東方時論』一九二二年九月号、八四頁。

(100) 前掲『大正期「革新」派の成立』一九六～二二六頁。

(101) 満川亀太郎『三国干渉以後』平凡社、一九三五年、二二九頁。前掲『大正期「革新」派の成立』一八八～一九四頁。

(102) 『東方時論』一九二二年九月号、七二～三頁。

(103) 木坂順一郎「革新倶楽部論」井上清編『大正期の政治と社会』岩波書店、一九六九年、二八四～七頁。

(104) 『読売新聞』一九二二年四月一一日付。

(105) 同右、四月一一日付。

(106) 前掲「革新倶楽部論」二八七～九頁。

(107) 『東方時論』一九二二年九月号、八五頁。
(108) 前掲「又新社記」八三頁。そもそも「国民主義」は中野正剛の予てよりの持論である。中野は一九二〇年七月の第四三議会で普選法案が否決された後、既成政党に期待できないのであれば「直接に国民に期待するの外はな」（一九頁）く、「今後の政党は国民自らによつて組織せられ、国民が各々基金を醵出し、代表者を議会に送」（二三頁）らねばならないとして、「国民」との直結による既成政党の打破を主張していた。中野正剛「新政治運動の新機軸」『東方時論』一九二〇年九月号。有馬学『「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社、一九九九年、一九九頁、参照。
(109) 「又新社とは何ぞや」『東方時論』一九二二年九月号、七一頁。
(110) 前掲『中野正剛の生涯』一七八～八六頁。
(111) 「アントーノフとの会見記」『東方時論』一九二二年九月号、七四頁。
(112) 『東京朝日新聞』一九二二年九月一九日付夕刊。
(113) 「対露交渉促進演説会記」『東方時論』一九二二年一〇月号、一一七～八頁。
(114) 『東方時論』一九二二年九月号、八四頁。
(115) 同右、一九二二年一〇月号、一一九頁。
(116) 同右、一九二二年一〇月号、一一九頁。
(117) 同右、一九二二年一〇月号、一一五頁。
(118) 同右、一九二二年一〇月号、一一六頁。
(119) 中野正剛「政界革新の魁」同右、一九二二年五月号、一二頁。
(120) 『読売新聞』一九二二年八月二七日付。
(121) 前掲『風見章日記』四九二頁。
(122) 前掲「旭街雑信一」。
(123) 風見章「読書日記一　ペンチーの予言」『信濃毎日新聞』一九二二年一一月二日付。
(124) 風見章「読書日記五　農民を保護せよ」『信濃毎日新聞』一九二二年一一月八日付。
(125) ギルド社会主義については、渡部徹「一九一八年より二一年にいたる労働運動思想の推移」前掲『大正期の政治と社会』参照。
(126) この点は新体制運動期に支配的な思潮となる協同社会論の原初的な現われとも見ることができるだろう。